

二〇一八年度日本語・日本文学科卒業研究題目一覧

『魔法少女まどか☆マギカ』論	高島 千聖	『源氏物語』における「浮舟物語」をめぐる	河原 梨香子
現代文学作品の受容について	柳谷 西夏	『史記』から見る司馬遷の思想	北川 奈々
古代文学における鬼について	稲葉 栞里	佐藤さとの論	工藤 優美
近代化とドッペルゲンガー	遠藤 雪乃	『源氏物語』における六条御息所をめぐる	黒木 芹菜
女性と人身御供	茂野 佳菜子	女と女の文学	小松 明日香
福永令三『クレヨン王国』シリーズ作品論	樋渡 麻衣	『はなはなみんみ物語』論	酒井 基子
加藤千蔭の『万葉集』観	相原 みさき	村上春樹とアメリカ文化	櫻井 麻奈
太宰治論	秋山 千雛	古代日本における言霊信仰について	佐藤 安奈
『古事記』『日本書紀』におけるスサノヲについて	池田 みず穂	中世の女人と出家について―『とはすがたり』を中心に―	佐藤 絵里
『源氏物語』における六条御息所について	石川 洋子	上代文学における蛙について	佐藤 優理
時代による巴御前像の変容	石田 萌子	古代日本文学における狐について	佐野 真捺
『日本霊異記』上巻第二十二縁考	石森 絵美子	文学とヒューマニズム	澤邊 彩佳
新言文一致体研究	猪村 真歩	萩原朔太郎『猫町』論	柴田 涼花
全体主義・世界システム・児童文学	大谷内 祐希	谷崎潤一郎論	清水 梨緒
『源氏物語』における「夢」	小澤 比奈子	『源氏物語』桐壺巻における漢籍引用	白川 萌絵
庭という場と文学	小野木 瑠夏	ものがたりの中の崇徳院	白坂 美咲
『源氏物語』中の品の女について	加納 えりか	若者層における北海道方言の残存について	菅原 真子
尾崎翠論	川崎 裕子	エゴイズムと文学	鈴木 茉菜

内田百閒論

青森県黒石市方言の世代差について

『獣の奏者』論

古代日本における「名」の持つ意味

日韓大学生における敬語使用及び談話行動での語法の比較

村上春樹『騎士団長殺し』論

花の窟考

三遊亭円朝『怪談牡丹燈籠』における場面の敬語について

芥川龍之介論

『西の善き魔女』論

『春色梅児譽美』における女性のことばづかいについて

紫の上の妻としての立場について

『源氏物語』における出家について

根の堅州国について

ピノキオ論

光源氏と女君の恋について

クリシタン資料における表記について

『古事記』・『日本書紀』における黄泉国について
『西鶴諸国はなし』「忍び扇の長歌」論

鈴木 桃子

高木 ひなの

高松 里衣

高丸 みなみ

滝川 詩央里

武山 紗也佳

館岡 志歩

田邊 桃子

筒井 祐里咲

長岡 南瑠海

中川原 優菜

中嶋 爽夏

中野 衣理

成田 真帆

西出 奈未

野崎 愛

長谷川 茜

林 真子

日本文学におけるエドガー・アラン・ポー

『日本霊異記』上巻三十縁からみる地獄

『南総里見八犬伝』論

記紀から探る「白」と動物の関係性について

『平家物語』における平知盛の人物像

『日本霊異記』編者景戒について

女房の恋歌

原民喜『夏の花』論

ミヒヤエル・エンデと日本の児童文学

『源氏物語』における長恨歌引用について

弘徽殿太后及び右大臣側から見た『源氏物語』

梶井基次郎論

『源氏物語』における乳母子について

『うつほ物語』論

文学教材の中のエチカ

『枕草子』の生存戦略／回想章段における清少納言の思惑

夏目漱石前期三部作論

『源氏物語』紫の上論

『枕草子』論

笛田 彩乃

細川 颯稀

細川 桃見

洞内 来実

本多 理乃

松澤 七海

松永 優希

三井 優花子

宮川 乃梨子

村上 楓

村上 結衣

森田 桃花

門伝 沙也香

安岡 沙東子

山内 真菜

山下 ひかり

横村 志歩

吉川 小雪

海野 嘉子

【クラスター卒業研究】

〈学科内クラスター〉

東アジア圏からの北海道旅行者の観光行動について

金子 百花

〈他学科への提出〉

文化総合学科へ

吉田松陰の人物像の変遷

本間 かれん

『藤女子大学国文学雑誌』 投稿規程

- 1 「藤女子大学国文学雑誌」は藤女子大学日本語・日本文学会（日本語・日本文学科）の機関誌であり、会員からの日本文学・日本語学・日本文化・漢文学・国語教育関係などについての論考を募集します。
なお、本学を退職した旧会員からの投稿は認めることがありません。
- 2 投稿論文の枚数は、四〇〇字詰原稿用紙三〇枚から四〇枚を基準とします。
- 3 投稿論文は完全原稿とし、注の形式は既刊のものに準じてください。
- 4 投稿論文には連絡先を明記のうえ、本会事務局にお送りください。原稿は可能ながぎり電子ファイルとし、打ち出した原稿一部を添えて投稿してください。また、その際、四〇〇字に換算した枚数も書き添えてください。
- 5 投稿の採否は、編集委員会にご一任ください。なお、原稿はお返ししません。
- 6 投稿は随時受け付けます。但し、雑誌発行は年二回の予定です。
- 7 論文掲載の場合は、本誌五部と抜き刷り三〇部をお渡しします。
- 8 「藤女子大学国文学雑誌」に掲載された論文などの著作権は

著者に帰属するものとします。ただし、掲載された論文などの電子化及び電子化による公開については、本学及び本学が委託する機関が行うことを許諾するものとします。

編集後記

専任教員の論文三本、卒業生の論文一本を掲載した『藤女子大学国文学雑誌』第一〇一号をお届けする。

前号で本誌は、一〇〇号に到達し、本一〇一号は、刊行時期の変更とその厳格化によるあらたな出発となる。(新しい刊行時期は、六月末と二月末となった)。この再出発が「令和元年」であるのは、偶然にすぎない。「元号」で考えれば、たしかに「昭和」「平成」と編まれ、「令和」においてもそれは続けられていくはずだが、本号の編集子は、「元号」ではなく、「西暦」で時代を実感してきたので、むしろ「元号」で思考することはほとんどない。二一年前に藤女子大学国文学科に赴任し、本学がカトリックの大学であるにもかかわらず「学年暦」が、「元号」であったことにむしろ驚いたものだ。

『藤女子大学国文学雑誌』一号が世に問う形で発行されたのは、一九六七年三月、「学園紛争」で日本の大学が揺れていた時期である。五〇号が発行された一九九三年三月は、「バブル経済崩壊期」の只中だった。一号から五〇号まで重ねた時間は、二六年、五一号から、九九・一〇〇号合併号まで二六年、計五二年、つまりは半世紀余の歴史をくぐり抜けてきたのだった。

そして、本号は、教員の頭脳がいちじるしい「視野狭窄」になるくらい「雑務」によって心身ともに削り取られて行く「人文学

の危機」の時代に置かれている。

先日、編集子が主任であった二〇一五年にご逝去された丸山隆司先生のご命日に、ご自宅にご焼香に伺った際、御霊前には第九九・一〇〇号が、供えられていた。丸山先生は、生前本誌に四一本もの論文を投稿されていたが、まだお元気でいらつしやれば、連載をはじめかけた論文がさらに充実してその数を増やしていったのではないかと思うとあらためて残念で仕方がない。先生の口癖は、「忙しい時こそ論文は書きつづけなければならぬ」であったが、そのお言葉に応答されているのが、漆崎先生で、現職では本誌に最多となる四三本目となる論文を当号に投稿されている。また関谷先生は二四本目、揚妻先生は一八本目となる。編集子の投稿数は、まことに恥ずかしい限りではあるが、三名の先生方には遠く及ばない。

「人文学の危機」の時代であるからこそ、時代に抗い、研究と教育の再構築が急務であろう。自戒の念を込め、あらためて『藤女子大学国文学雑誌』の意義を世に問いたいと思う。(S)

二〇一九年六月二十五日 印刷

二〇一九年六月三十日 発行

藤女子大学 国文学雑誌(第101号)

定価 五〇〇円 送料二二〇円

振替 〇二七〇〇一四一六八〇七番

編集人

揚 妻 祐 樹

発行人

札幌市北区北十六条西二丁目

発行所

藤女子大学日本語・日本文学科学研究室内

藤女子大学日本語・日本文学系

印刷所

札幌市中央区北六条西十五丁目

(株)491アヴァン札幌